

SRID NEWSLETTER

No. 357 AUGUST 2005 国際開発研究者協会 創設者大来佐武郎
〒102 -0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内
URL: <http://www1.odn.ne.jp/~cdv20180>

8月号

戦後60年、日本の国際協力に思う 政党職員 樋口 博康
ルーマニアでの横浜港・コンスタンツァ港共同セミナーの様子
国際協力銀行 開発第3部第1班 林 遼太郎

お知らせ

1. 9月の幹事会 9月12日(月) 18:30~20時
会場: 国際協力銀行の予定
2. ミニシンポジウム 10月8日(土)に予定

戦後60年、日本の国際協力に思う

政党職員 樋口博康

残暑お見舞い申し上げます。

SRIDのみなさまには、ご健勝にてご活躍のことと存じます。

こここのところ久しくSRIDの活動から遠ざかっていることを大変申し訳なく思っています。そのような中、時々、声をかけていただくことを本当に嬉しく感謝しています。今回、ニュースレターへの原稿を依頼され、国際協力分野の仕事から長く離れていることもあり、ためらいと気後れを感じましたが、順番で会員の責務ということなので、近況報告も兼ねて恥ずかしながら拙文にて冒頭を汚すことをご容赦ください。

さて、今年には戦後60年にあたり、ひとつの時代の節目としてさまざまな分野で検証や総括が行われています。戦後日本の国際協力の歩みも、この60年間の世界の動きやわが国の発展と並べてみるときに、本当にわが国の世界でのあり方を鏡のように映し出しているようで大変感慨深いものがあります。この間の歩みは、外務省のホームページに大変詳しく記載されています。長く国際協力に携わってこられたSRIDのみなさまには釈迦に説法で、またそれぞれに深い思いをお持ちのことと思います。私が国際協力に関わる仕事に入った80年代に比べてさえこの間の変化には隔世の感を抱きます。

戦後、二度と戦争の過ちを繰り返さないという平和への強い意志のもとで、文字通り焼け跡から日本人は必死に働き復興に努めてきました。冷戦が厳しくなる中で、世銀や西側諸国からの支援と協力を受けながら、諸先輩方の懸命な努力で日本は高度経済成長を遂げ、50年代半ばのコロンボ・プラン加盟による技術協力の開始、戦後賠償、そして円借款へと進み、60年代にはOECDに加盟し、量の拡大や援助実施体制の強化をしてきました。

援助される側から援助する側となり、70、80年代とさらに経済力をつける中で、西側陣営の一員として、日本は経済協力を通じて自由主義経済の発展と西側陣営の強化に寄与してきたと思います。この間、誰のための何のための「援助」「経済協力」なのか、巨大インフラ偏重だとか、日本の貿易振興目的だとか、真に援助を必要する人々を裨益しないとか、環境破壊や人権問題などを軽視しているなど、様々な批判がありました。様々な角度からのこうした指摘や批判の多くが適確でしたし、理想と現実との相克なのだとも思います。ただ振り返ってみれば、多くの人々の英知と努力で、日本はこういった問題の多くを受け止めて取り組んできたし、内容や実施体制も着実に進歩・充実させて、アジアをはじめ多くの途上国の発展に寄与してきたと思います。NGOなど市民活動との連携や草の根レベルの協力も少しずつでも進み、より参加型の国際協力が国民の間でも定着してきました。冷戦が終わった90年代以降は、旧東側諸国の市場経済への移行や民主化、地球的な課題への取り組みなど経済開発ばかりでなく国際社会の福祉の向上という面でも、わが国の国際協力は、質・内容・実施方法も劇的に変化してきたと思います。国際社会に復帰して以来、国連や経済協力など日本として可能な最大限の国際社会への貢献活動の積み重ねによって、ようやく今日のわが国の平和で安定した信頼ある地位を回復できたのだと思います。その意味で、確かに問題は多かったけれども、試行錯誤をへて日本の国際協力での努力とその成果は十分評価されるものだと思います。

ただ、それで満足できるかというとは決してそういうことではありません。時代が

刻々と進んでいく中で、戦後60年の今という時点に立って、明らかに世界や日本の風景はこれまでの60年と変わってきています。人も社会も変わりました。一方で、戦後60年間、世界中が多額の援助を行いながら、ますます世界の経済格差は拡大し、貧困はなくなり、地球温暖化や環境破壊といった開発に伴う問題や人道・人権抑圧・暴力や感染症などの問題が深刻化している厳然とした現実があります。日本は人口減少・少子高齢化という現実と直面し、財政も危機的な状況にあります。金額面ではこれから大幅な増額は望めず、国民所得の0.7%という国際目標も実現できるかどうかわかりません。このような厳しい現実と直面しながら、日本の国際協力も世界と日本の平和と繁栄に一層資するために、そのあり方が絶えず問われているのだと思います。

これまで日本がこれほどの国際協力を行いながら、顔が見えない、世界から十分評価されない、などと言われることがありました。また、国連安保理改革で常任理事国入りを目指す中で、「カネで票を買う」というような批判がでるのはなぜでしょうか。私は、これまでたしかに日本は頑張ってきたけれども、それは米国などが主導して設定した国際社会の枠組みの中でどれだけ汗をかき貢献するかということが多く、国際社会で追求されるべき普遍的な価値を実現するための世界のあり方や枠組みそのものを提言し、それらを創るために積極的に世界に働きかけイニシアチブをとることがなかなか出来なかったためではないかと思います。

たしかに敗戦国としてゼロから再出発した日本にとって、冷戦が半世紀近くを占めた時代では、無理からぬことだったのかもしれませんが。しかしそういう冷戦構造という限られた枠組みの時代でも、SRIDの生みの親である大来先生のように、わが国の経済発展の経験と経済力をアジアをはじめ途上国との信頼関係と新しい国際秩序の構築に向けて先導された偉大な先人の姿から大いに教えられ勇気づけられるのです。

今年の英国でのサミットでも、ブレア首相は、アフリカ支援で自ら委員長となる検討委員会を作って準備を進め、国際社会と交渉して合意を取り付けました。日本はTICADなどアフリカ支援の地道な努力を長く積み重ねてきていながら、必ずしも存在感を持って先導的な役割を担う姿はみられませんでした。しかし、日本が世界でも有数の経済的な繁栄を享受する現在、世界とともにある日本の責任として、これまで以上に主体的に国際社会のあり方を構想し、各国に働きかけていく時代なのだと思います。そしてこれは外務省というよりも日本の政治の問題なのだと思います。

余談ですが、私は今、政治の現場近くに身をおいていると、戦後60年に培われ

た万年与党と万年野党の55年体制の発想から多くの日本人がまだ抜けきれないでいるように思います。次々と近隣アジア諸国で民主的選挙によって政権交代が実現され、近代アジアで政権交代がないのは中国、北朝鮮、ベトナムといった社会主義国と日本だけとなりました。和と安定を好む日本人の文化性なのかもしれませんが、主権を持つ国民の選択で民主的に政権交代ができることは、成熟した正常な民主主義のあり方だと思います。私は過去の誤りを率直に認めそこから謙虚に学びつつも、自分たちの発想や行動を縛っている価値観や時代観は何なのかを問うて、たとえそれが過去に成功をもたらしたもので見直して、変革のために必要であれば潔く捨てるのが大切なのだと思います。

世界という大きな海の上に浮かんで、人以外のほとんどの物資を世界に依存する日本にとって国際社会との共存共栄しか生きる道はないことは言うまでもありません。私は、国際協力や援助といったことが、狭い国益やナショナリズムで考えられるのではなく、日本において当然となっている貧困からの解放や人道・人権といったような人類普遍の価値を世界でも実現していくといった視点で、国民が一部の特別な専門家の世界と感ずるのではなく、身近に国民の間で議論され理解され支持されていくことが大切なのだと思います。そのためにもまずは政治家に広い視野を国民に示して欲しいし、このような意識を持って活動しておられるNPO/NGOのみなさんが、日本の政治に対して声を大にしてプレッシャーをかけていくことが大切なのだと思います。

身の程もわきまえず、まとまりのない雑文となり恐縮です。まだまだ暑い夏が続きます。SRIDのみなさまのご健勝とますますのご発展を心からお祈りいたします。

ルーマニアでの横浜港・コンスタンツァ港共同セミナーの様子

国際協力銀行開発第3部 第1班 林 遼太郎

SRID 学生部時代から皆様にはお世話になっております、現在国際協力銀行(JBIC)2年目の林です。現在は開発第3部第1班というところで、中東欧及びトルコ、パキスタン、アフガニスタン向けの海外経済協力業務に携わっております。主担当は社会主義体制から市場経済への移行段階にあるルーマニア、内戦後の平和定着の途上にあるボスニア・ヘルツェゴビナ、社会主義体制から市場主義への移行国、内戦後平和定着が指向される国、核実験やリスクが原因で円借款供与が見送られていたが、テロと戦う姿勢を評価し、8月10日にやっと円借款供与に至ったパ

キスタンです。どの国も特徴があり、お伝えしたい内容はたくさんあるのですが、今回はちょうど本日（8月13日）ルーマニア出張から帰国したため、その様子をお伝えしようと思います。

今回のルーマニア出張の主たる目的は、横浜港・コンスタンツァ港の共同セミナー開催にありました。JBIC はルーマニアに向けて初の円借款事業となる、「コンスタンツァ南港整備事業」に対し 1998 年に借款供与を行っております。コンスタンツァ港はルーマニアの東端にあり、黒海最大の貿易港として有名です。そこで、急増するコンテナ取扱量に対応するため、南港地区に 2008 年までのコンテナ需要に対応するコンテナターミナル2バース及び岸壁クレーン3基等の関連施設を整備することを事業目的としたもので、昨年末に無事事業が完成致しました。JBIC は事業完成すると、事業完成の 2 年後に事後評価を行うことを除けば、（検査院や参議院、ODA 民間モニター視察など）特別な事情がない限り、完成事業のフォローはそれほど通常はしません。

しかし、①今回はルーマニアにおける初の完成事業となったこと、②効果が当初想定していたものを上回る貨物の取扱量となっており、JBIC としてもプレイアップできればという意向があったこと、③横浜市がコンスタンツァ市と姉妹都市であり、自治体連携という観点から日本の知見を活用できるものと考えられたことから、ルーマニアのコンスタンツァにおいて、この度共同セミナーを開催するに至りました。

セミナーは主に、「コンスタンツァ南港整備事業」の一層のターミナル利用等の活用という視点ではなく、コンスタンツァ港はルーマニア運輸省の傘下であり、コンスタンツァ市とは分離されて運営されている（実際にコンスタンツァ市とコンスタンツァ港のマスタープランは別々に作成されているとのこと）ため、横浜市港湾局のように市と港湾局が一体となっている例を紹介し、「港湾都市としての街づくり」という事業だけでなく、もっと広い意味での効果発現を意図して開催したものです。そのため、今回は横浜市港湾局から 2 名実際にルーマニアのコンスタンツァまで同行していただき、セミナーで発表していただきました。

セミナーを終えて、担当レベルでの率直な感想をお伝えすると、今回のセミナーは残念ながら失敗だったのだと思います。その理由としては①現在ルーマニアは夏休みの期間であり、然るべき十分な出席者が集まらなかった、②港湾都市としての街づくりがテーマであったが、各機関がそれぞれ今後の投資計画（JBIC が純粋な「銀行」と相手には考えられているためか！？）を発表しだしてしまっただけポイントがずれた、③コンスタンツァ市が当日プレスを準備し、インタビュー等の時間

で予定通りセミナーが進まなかったことが大きな原因としてあげられます。

当日はルーマニア運輸省も参加する予定だったのですが、コンスタンツァ市が非常にある意味用意周到だったのを感じてか、港湾利用を（多分）このまま運輸省の傘下におさめておきたい運輸省は当日夏休みを理由に出席をキャンセルし、その点非常に残念でした。

もちろん全く無意味であったかというところではなく、プレスに予定は乱されましたが、JBIC や横浜市港湾局の取り組みをプレスを通じてコンスタンツァ市の市民の方に知っていただく機会となったこと、コンスタンツァ市と横浜市の姉妹都市関係の促進につながったことは一定の成果だと思われれます。特にルーマニアは日本とは非常に地理的に遠く、良くなぜそもそもルーマニアに援助しているのか？無駄じゃないかといった意見が聞かれることに対し、少しでも円借款事業がルーマニアの役に立っており、かつ姉妹都市として横浜市との交流が続いていること（JBIC にとっては自治体連携にも力を入れていること）を伝えることができる機会になったのではないかと思います。

個人的にも横浜市港湾局の方と今回出張同行して、横浜市の港湾都市としての街づくりの取り組みがどのようなものかを聞けて、非常に勉強になりました。港は道路や鉄道のような2地点間の点と点を結ぶ経済インフラではなく、一つの点が複数地点間をつなぎ、物流を促進するという当たり前のことが非常に新鮮で興味深い世界に見えてきました。

今、港湾だけでなく道路事業、鉄道事業といった運輸セクター、電力セクターを担当しており、少しずつ各セクターの全体像が見えてきたところです。このまま行くと、各セクターについてある程度世界が見えてきた半年後くらいに異動してしまいそうですが（苦笑）、また SRID 本会で経験豊富な皆様から いろいろなお話を伺い、今後の実務に生かしていければと思いますので、引き続き宜しくお願い致します。